

月とあざらし

小川未明

青空文庫

北方ほつぽうの海うみは、銀色ぎんいろに凍こおっていました。長い冬ながふゆの間あいだ、太陽たいようはめつたにそこへは顔かおを見せなかつたのです。なぜなら、太陽たいようは、陰気いんきなところは、好すかなかつたからでありました。そして、海うみは、ちようど死しんだ魚うおの目めのように、どんよりと曇くもつて、毎日まいにち、毎日まいにち、雪ゆきが降ふっていました。

一ひびきの親おやのあざらしが、氷山ひょうざんのいただきにうづくまつて、ぼんやりとあたりを見まわしていました。そのあざらしは、やさしい心こころをもつたあざらしでありました。秋あきのはじめに、どこへか、姿すがたの見えなくなつた、自分じぶんのいとしい子供こどものことを忘れわすれずに、こうして、毎日まいにちあたりを見まわしているのです。

「どこへいったものだろう……今日きょうも、まだ姿すがたは見えない。」

あざらしは、こう思おもっていたのでありました。

寒い風さむかぜは、頻しきりなしに吹ふいていました。子供こどもを失うしなつた、あざらしは、なにを見ても悲かなしくてなりませんでした。その時じぶん分ぶんは、青あおかつた海うみの色いろが、いま銀色ぎんいろになつているのを見ても、また、体からだに降ふりかかる白雪しらゆきを見ても、悲かなしみが心こころをそそつたのであります。

風かぜは、ヒュー、ヒューと音おとをたてて吹ふいていました。あざらしは、この風かぜに向むかつて、

訴えずにはいられなかつたのです。

「どこかで、私のかわいい子供の姿をお見になりませんか。」と、哀れなあざらしは、声を曇らして、たずねました。

いままで、傍若無人に吹いていた暴風は、こうあざらしに問いかけられると、ちよつとその叫びをとめました。

「あざらしさん、あなたは、いなくなつた子供のことを思つて、毎日そこに、そうしてうづくまつていなさるのですか。私は、なんのために、いつまでも、あなたがじつとしていなさるのかわからなかつたのです。私は、いま雪と戦っているのです。この海を雪が占領するか、私が占領するか、ここしばらくは、命がけの競争をしているのですよ。さあ、私は、たいいていこのあたりの海の上は、一通りくまなく馳けてみたのですが、あざらしの子供を見ませんでした。氷の蔭にでも隠れて泣いているのかもしれないが……。こんど、よく注意をして見てきてあげましょう。」

「あなたは、ごしんせつな方です。いくら、あなたたちが、寒く、冷たくても、私は、ここに我慢をして待っていますから、どうか、この海を馳けめぐりなさるときに、私の子供が、親を探して泣いていたら、どうか私に知らせてください。私は、どんなところである

うと、氷の山を飛び越して迎えにゆきますから……。」「と、あざらしは、目に涙をためて
いいました。

風は、行く先を急ぎながらも、顧みて、

「しかし、あざらしさん、秋ごろ、猟船が、このあたりまで見えましたから、そのと
き、人間に捕られたなら、もはや帰りつこはありませんよ。もし、こんど、私がよく探
してきて見つからなかったら、あきらめなさい。」と、風はいい残して、馳けてゆきまし
た。

その後で、あざらしは、悲しそうな声をたててないたのです。

あざらしは、毎日、風の便りを待っていました。しかし、一度、約束をしていった
風は、いくら待ってももどつてはこなかったのです。

「あの風は、どうしたろう……。」「

あざらしは、こんどその風のことも気にかげずにはいられませんでした。後からも、後
からも、頼りなしに、風は吹いていました。けれど同じ風が、ふたたび自分を吹くのをあ
ざらしは見ませんでした。

「もし、もし、あなたは、これから、どちらへおゆきになるのですか……。」「と、あざら

しは、このとき、自分の前を過ぎる風に向かつて問いかけたのです。

「さあ、どこということはできません。仲間が先へゆく後を私たちは、ついてゆくばかりなのですから……。」と、その風は答えました。

「ずっと先へいった風に、私は頼んだことがあるのです。その返事を聞きたいと思つてい

るのですが……。」と、あざらしは、悲しそうにいいました。

「そんなら、あなたとお約束をした風は、まだもどつてはこないのでしょうか。私が、その風にあうかどうかかわからないが、あつたら、言伝をいたしましょう。」といつて、その風も、どこへとなく去つてしまいました。

海は、灰色に、静かに眠つていました。そして、雪は、風と戦つて、砕けたり、飛んだりしていました。

こうして、じつとしていくうちに、あざらしはいつであつたか、月が、自分の体を照らして、

「さびしいか？」といつてくれたことを思い出しました。そのとき、自分は、空を仰いで、

「さびしくて、しかたがない！」といつて、月に訴えたのでした。

すると、月は、物思い顔に、じつと自分を見ていたが、そのまま、黒い雲のうしろに

隠れてしまったことをあざらしは思い出したのであります。

さびしいあざらしは、毎日、毎夜、氷山のいただきに、うずくまって我が子供のことを思い、風のたよりを待ち、また、月のことなどを思っていたのであります。

月は、けつして、あざらしのことを忘れはしませんでした。太陽が、にぎやかな街をながめたり、花の咲く野原を楽しむように見下ろして、旅をするのちがって、月は、いつでもさびしい町や、暗い海を見ながら旅をつづけたのです。そして、哀れな人間の生活の有り様や、飢えにないている、哀れな動物などの姿をながめたのであります。

子供をなくした、親のあざらしが、夜も眠らずに、氷山の上で、悲しみながらほえているのを月がながめたとき、この世の中のたくさん悲しみに、慣れてしまつて、さまざま感じなかつた月も、心からかわいそうだと思ひました。あまりに、あたりの海は暗く、寒く、あざらしの心を楽しませるなにもなかつたからです。

「さびしいか？」といつて、わずかに月は、声をかけてやりましたが、あざらしは、悲しい胸のうちを、空を仰いで訴えたのでした。

しかし、月は、自分の力で、それをどうすることもできませんでした。その夜から、月はどうかして、この憐れなあざらしをなくさめてやりたいものと思ひました。

ある夜、月は、灰色の海の上を見下ろしながら、あのあざらしは、どうしたであろう
と思ひ、空の路を急ぎつつあったのです。やはり、風が寒く、雲は低く、氷山をかすめ
て飛んでいました。

はたして、哀れなあざらしは、その夜も、氷山のいただきにうづくまっています。
「さびしいか？」と、月はやさしくたずねました。

このまえよりも、あざらしは、幾分かやせて見えました。そして、悲しそうに、空を
仰いで、

「さびしい！ まだ、私の子供はわかりません。」と行って、月に訴えたのであります。
月は、青白い顔で、あざらしを見ました。その光は、憐れなあざらしの体を青白く
いろどったのでした。

「私は、世の中のどんなところも、見ないとくろはない。遠い国のおもしろい話をしてき
かせようか？」と、月は、あざらしにいいました。

すると、あざらしは、頭を振って、

「どうか、私の子供が、どこにいるか、教えてください。見つけたら知らしてくれとい
って約束をした風は、まだなんともいつてきてはくれません。世界じゅうのことがわか

るなら、ほかのことはききたくありませんが、私の子供は、いまどこにどうしているか教えてください。」と、あざらしは、月に向かつて頼みました。

月は、この言葉をきくと黙ってしまった。なんといつて答えていいか、わからなかつたからです。それほど、世の中には、あざらしばかりでなく、子供をなくしたり、さらわれたり、殺されたり、そのような悲しい事件が、そこそこにあつて、一つ一つ覚えてはいられなかつたからでした。

「この北海の上ばかりでも、幾ひきの子供をなくしたあざらしがいるかしのれない。しかし、おまえは、子供にやさしいから一倍悲しんでいるのだ。そして、私は、それだから、おまえをかわいそうに思っている。そのうちに、おまえを楽しませるものを持つてよう……。」と、月はいつて、また雲のうしろに隠れました。

月は、あざらしにした、約束をけつして忘れませんでした。ある晩方、南の方の野原で、若い男や、女が、咲き乱れた花の中で笛を吹き、太鼓を鳴らして踊っていました。月は、この有り様を空の上から見たのであります。

これらの男女は、いずれも牧人でした。もうこの地方は、暖かで、みんなは畑や、田に出て耕さなければなりません。一日野らに出て働いて、夕暮れになると、みん

なは、月の下でこうして踊り、その日の疲れを忘れるのでありました。

男どもは、牛や、羊を追つて、月の下のかすんだ道を帰つてゆきました。女たちは、花の中で休んでいました。そして、そのうちに、花の香りに酔い、やわらかな風に吹かれて、うとうとと眠つてしまつたものもありました。

このとき、月は、小さな太鼓が、草原の上に投げ出してあるのを見て、これを、哀れなあざらしに持つていつてやろうと思つたのです。

月が、手を伸ばして太鼓を拾つたのを、だれも気づきませんでした。その夜、月は、太鼓をしょつて、北の方へ旅をしました。

北の方の海は、依然として銀色に凍つて、寒い風が吹いていました。そして、あざらしは、氷山の上に、うずくまつていました。

「さあ、約束のものを持つてきた。」といつて、月は、太鼓をあざらしに渡してやりました。

あざらしは、その太鼓が氣にいつたとみえます。月が、しばらく日をたつて後に、このあたりの海上を照らしたときは、氷が解けはじめて、あざらしの鳴らしている太鼓の音が、波の間からきこえました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

底本の親本：「小川未明童話全集 4」講談社

1950（昭和25）年

初出：「愛の泉 8号」

1925（大正14）年4月

※表題は底本では、「月《つき》とあざらし」となっています。

※初出時の表題は「月と海豹」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月とあざらし

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>